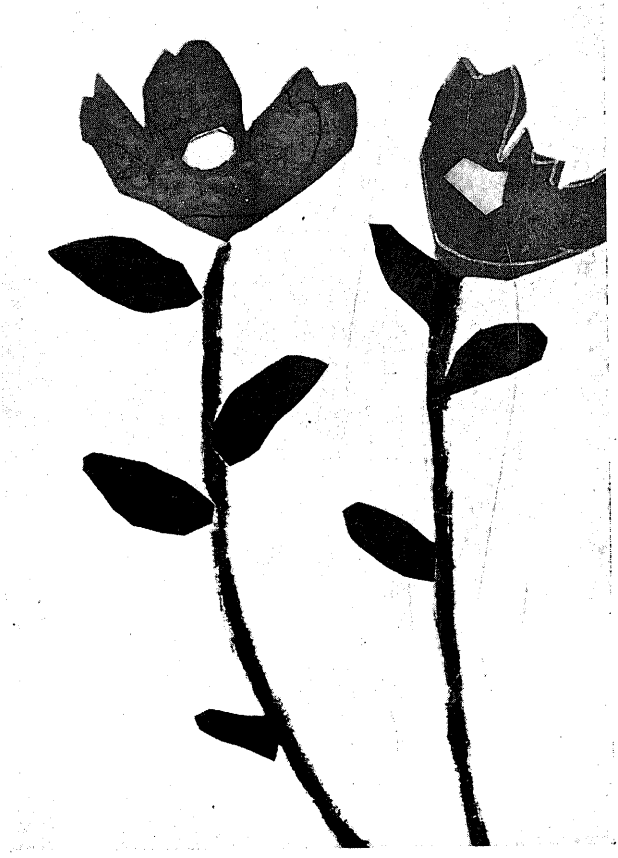

早春の南の國の眩ぶしいほどに苛い空を背景にして見る眞紅の椿の花は、（一と息に讀み下して下さい）、そのべつとりと肉附き豐かな花瓣のかたまりが、重つたるく太い區切りに浮び上つて、どうしても、厚味のある本いよまさの切り紙より繪の趣きです。子どもに、そんな風流はないでせうし、なくていゝのですが、この作品を見てゐると、たゞの繪にしなかつたところが、一寸心憎くならずにゐられません。勿論、色のある原作です。但し當節の、質の惡い、べら〳〵の色紙なのは、折角の工匠に、氣の毒です。（倉橋生）